

ひざが笑えば、家族も笑う

岡山市立南輝小学校

五年生 山本眞奈

「ガタガタガタガタッ」

わたしは今、中国地方で最も標高が高い大山を下山している。あと少して登山口にもどれるという所で、体力の限界がきた。ひざが笑っているのだ。止めようと思っても、止まらない。こんなことは人生で初めてだ。おもしろい。

わたしの家族は、毎年夏と秋に祖父の家に遊びに行く。高速道路から必ず見える大山は、どこにいても目立っし、雄大だ。まさかこんな大山を登ることになるとは、思いもしなかった。

今年の家族の目標は大山登山だ。両親が決めたのだ。「目標は山頂だけど、行ける所までがんばってみよう。」と父が言った。今年に入って、いろいろな山を登ってきた。大山の標高は千七百九メートル。今まで登ってきた山の中で一番高い。運動

が苦手なわたしには自信がなかった。そこで、夏休みに入って、早朝トレーニングを始めた。すずしくて、とても気持ち良かった。トレーニングを重ねたから、登頂の自信がついた。

七月二十二日、とうとう大山の登山口に来た。このとき、わたしはやる気がみなぎっていた。大山は、今まで登ってきた山とはくらべものにならないくらい、登山客が多かった。それだけ人気なのだろう。やる気満々で登山道へ入ったわたしが、少し歩くと、あることに気が付いた。進んでも進んでも階段ばかりなのだ。わたしは階段さんが大きらいだ。なぜなら一だんごとに足を上げないといけないし、体力がどんどんけずられていくからだ。もしかしたら大山は、わたしにとって登りにくい山なのかもしれない。とても不安になってきた。だが、たまに見える景色がとてもきれいで、少し元気をもらった。

母と弟は元気よくかなり前を進んでいた。わたしと父はくじけそうになりながら無言で進んだ。そして六合目に着いた。もうそこは雲の上だった。ここはひなん小屋で、たくさんの登山客が休けいしていた。確かにここは、とっても良い景色だし、ベンチもある。だがわたしはもう体力がどんどんなくなってきた。登頂は無理だと思った。でも両親が、「ここまで来たんだから山頂までがんばろうよ。」と言った。わたしはしょうげき

を受けた。

だけど、そんなわたしをすくってくれたのは、道の変化だ。今までは階段が続いていたけど、七合目くらいからロッククライミングのようになってきたのだ。わたしの大きらいな階段がなくなるとてもうれしい。だかしかし、小さな石が道中に転がっていてすべりやすい。手を使わないと進めない所もあり、こわかった。

そしてついに山頂にたどり着いた。登山開始から3時間以上も経っていた。達成感があった。開放感もあった。家族みんな喜びあった。山頂からの景色はともきれいで、日本海も見えた。人生の中で一番高い所に立っている。そのことに感動したが、逆にこわかった。山頂で景色を見ながら食べたおにぎりは絶品だった。

気合いを入れ直し、下山を始めた。弟はいつでも元気だったが、わたしと父は同じくらいつかれていた。母は登りは元気だったが、下りは苦手らしく、つらそうに見えた。

あともう少しで下山、というところで、わたしのひざが急に笑い始めた。つかれが大量にたまっていて、笑顔一つすらなかったが、わたしのひざが笑い出したことよって、家族みんなが思わず笑ってしまった。つかれが少しとれた。しんどいと

きこそ笑顔は大事だなと思った。

登山を始めて6時間。ついに登山口にもどってこれた。

ふもとから見た大山は、やっぱり大きかった。この大山を登りきれたなんて信じられない。これからも大山を見るたびにわたしは今回の登山のことを思い出すだろう。くじけそうになっても、あきらめずにかんばり続けたら、目標は必ず達成できるということ。

でも、もう登山はこりこりだな。